

昭和三十四年度

眞宗同學會研究發表要旨

止觀と念佛

横山 尙秀

宗教的行道特に佛教の如き宗教の事實を自覺の場に於て證悟せんとする立場には、教・信・行・證あるひは教・行・信・證の四法が存するわけで、教相と安心との結論的關係が正しく了解されるためにも教相と行道及び「行」の展開過程の本質的意味が問題となる。止觀と念佛は佛教行道の雙璧である。止觀は淨化光耀を以て常寂光土身土不二底の自體消化的成佛を期し、念佛は報身佛を稱念することに依つて不自由な自己からの超越を願ひ、本願なる佛の絶対無分別の大悲名號成就を聞信して淨土なる眞實の世界に根據づけられた現生不退の「信」を與えらる。即ち念佛には原理よりも生命を、生命より精神へ、精神から人格へと本願に於て現はれる大悲がその對象なのである。即ち本願成就の太行なる名號に依つて轉依の救済を知らしめられる。止觀と念佛はたゞ對照的であるのではなく、密接な交際關係を以て佛法の兩面を現はにしている。云はゞ法・報兩身の關係が「行」の面で明らかにされて行く。「止」は否定的淨化道として二元相對的在り方の意識の捨離、自我中心的執著による一切の觀念からの覺醒を基本とする離脱の「行」である。佛教に於ける、「觀」行道の展開は禪觀から止觀へと云ふ時、

「教」(經)に依る法界を對象とする理觀へ、それが實存的な面あるひは大乗的立場に出て天台の止觀の如く瑜伽や定中見佛と云つた志向性の面だけでなく、個々の事象に「事」的な形に於ける人生的な諸條件の下で宗教の眞理が浸透してゐることを示す。而して天台の常行三昧が念佛三昧として報身佛を對象とし、淨土の祖師方は報身佛の人格性の本質である本願の發見から、能見的觀(習得的觀)から「見られ、注ぎ込まれた廻向された觀」に轉ずることに依つて主觀的觀念の世界から開かれた絶対(他力)の世界に遇えたのである。此のことが念佛の原本的意義であり、如來の三昧力が根據となつて、「行」が「信」に「見」が「聞」に轉ずる第一の理法が現はになる。即ち自己(人間)の生活を通じ最も根本的な問題が觀行から稱念への展開に於て現はにされ客觀化されて「信」の認知性が示されて来る。即ち稱名念佛に依つて行道は教・信・行・證の順でなく、教・行・信・證となつて、「信」は單なる信念信仰と云つたものでなく、「行」の究極的到達點が徹底的に批判せられた結果として現はれた宗教的體認として「證」に觸れた位態でさえある。離念無想や一心三觀等の習得的觀に對して善導の淨土觀は既に主觀の調正と云ふ如き立場を離れて、自己を超えた絕對性の對象莊嚴淨土の大地性根據性から來るもの即ち如來の本願名號から來るもの、即ち自己に與えられてゐる他力に攝受される絕對受動的宗教的態度である。聞信とは主觀の場に取り込んで理論する立場でなく、閉された自己が如來の悲智絕對なる光明によつて開かれた世界に攝受される立場であつて、「極樂に往生するもの己心の佛性をあらはしてなにするや」と示された

淨土教の往生に連なる最も客觀的な世界の眞理に於て證される
行信が現成した。
(昭和三十四年十一月二十一日)

『遊心安樂道』元曉作説への疑問

村地 哲明

『遊心安樂道』は古い時代の諸種の目録には見當らず、法然上人の『選擇集』(本、二左)及び『逆修説法』(法然上人著、集三二七頁に、

「元曉遊心安樂道云」

と記述せられて、本書を元曉の述作に歸せられている事實を知る。所で、このような法然上人の記載に基いて考察するとき、本書の製作者が元曉に歸せられている史實の相當に古いことは想像されよう。そして古來から、かような元曉作説を疑つた學説は見當らないように思われる。しかし、富貴原章信師がすでに發表された處の高仙寺哲幢塔碑によると、元曉は垂拱二年(六八六)三月三十日に七十歳で入寂しているから、かかる元曉の遺著に、神龍三年(七〇七元曉歿)に菩提流志が翻譯した『不空羼索神變眞言經』(開元錄第九、結四・八二右)を引用したり、又、同三藏が神龍二年(七〇六)から譯出して先天二年(七二三神龍歿)に終つたという『大寶積經』(開元錄第九、結四・八二左)をも引用することなどは、本書を元曉作とする説に疑問をなげかけさせずにはおかぬ結果となる。又更に、これらの二經典を後人の加筆であると假定してみたとしても、本書では元曉の後輩たる懷感(六九五)の『群疑論』の九品生位章の敍説が、明らかに依用されておる事實から考えて見ても、古來からの元曉作説は疑わざるをえぬのである。

所で、かかる疑問を解決するために試みに本書の内容を検討してみると、『遊心安樂道』では、まず元曉の著作である『兩卷無量壽經宗要』の大部分を、六回に互つてそのまま轉載しているという事實を知る。つぎに、迦才『淨土論』と『遊心安樂道』との關係を眺めてみるに、この事柄に關しては知俊以來すでにふれられ、名畑應順師の『迦才淨土論の研究』では詳細に述べられている。而して私の研究によると、『遊心安樂道』では迦才の『淨土論』文を九回に互つて用いている事實を知るのである。このように『遊心安樂道』ではその構成されている大部分が、元曉の『大經宗要』と迦才『淨土論』との轉用に過ぎなく、しかもここに注意を惹くことは、元曉と迦才との二師が釋せる『彌勒發問經』の十念義の解説を記載して、かかる兩師説の中、元曉説を否定する立場に導いている事實は、本書が元曉の著作でないことをおのずから顯わしている證左であるように思われる。

なお、先天二年(七二三)譯の『大寶積經』を引用する事實は、本書が開元元年(七一三)以後の述作であることを示唆する。又、卷末の『不空羼索神變眞言經』の引用は、密教の密呪によつて西方の往生を説く思想、及び眞言の密呪によつて亡者の靈を供養する思想などは、善無畏が開元四年に入朝してから密教が隆盛に向い、以てかかる密教と從來の念佛とが雙修せられたことを示す資料であると共に、本書の著作もその頃の時代になるのではないかと思われる。更に、本書が元曉作に歸せられたことについては、元曉の『大經宗要』の文を最も多く依用していることと、密教的民俗的信仰を權威づけようとする企圖から出たも